

岬之町だより

第4回 「下関における日銀の歴史」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

前回の岬之町だよりでご紹介したとおり、下関は高橋是清が日銀支店の初代支店長を務めた街なのだが、地元ではその事実はあまり知られてはいないようだ。今回は、この下関で日銀がどのような変遷を遂げてきたのかを紹介したい。

日銀下関支店は、全国の日銀支店の中でもちよつと変わった支店である。まず、県庁所在地に日銀がなくて、それ以外の街に日銀があるのは、山口県（下関支店）と長野県（松本支店）だけだ。とはいえ、下関市は県内最大人口を誇る市であり、様々な産業も集積しているので、県庁所在地の山口市ではなく、下関市に日銀が置かれていること自体は、さほど違和感のある話ではない。

海峽を挟むとはいえ、下関市と北九州市という隣接した二つの街の双方に日銀支店が置かれているという例も全国でここだけだ。日銀の店舗は、本店と支店を合わせて全国に三十三しかない。日本列島の長さを三千キロとすると、仮に一直線に均等に並んだとしても、店舗間の平均距離は百キロ程度はあることになる。にもかかわらず、日銀下関支店と北九州支店との直線距離は僅か八・九キロしかない。日銀の店舗間の距離が日本で一番近いのは、この二店間である。

そして、日銀下関支店の最大の特長は、その歴史にある。下関は、一八九三年（明治二十六年）に、大阪に次ぐ二番目の日銀の支店「西部（さいぶ）支店」が置かれた街である。下関が日本全体で二番目だったというのもすごいし、その初代支店長が高橋是清だったというのも



誇らしい事実だ。ところが、支店設置から五年後、日銀西部支店は下関を撤退し、門司に移転してしまった。それから五十年近く経ち、一九四七年（昭和二十二年）に、日銀は再び下関に支店を開設した。全国の日銀支店の中で、いったん撤退してしまっただけでその街に再び出店したのは、下関支店だけである。

日銀下関支店が、他の日銀支店に見られない歴史的、地理的な特殊性を持つようになったのは、関門海峽を挟んだ下関と門司、北九州との特殊な関係がある。

下関は、明治、大正、昭和と、対岸にある門司と一体となって経済的な発展を遂げてきた。西部支店以降の日銀の支店は、「関門地域における日銀の支店」という位置付けを担ってきたのである。他方、関門地域は、山口県、福岡県という別々の自治体、中国地方、九州地方という別々の地方に属するという特殊な経済圏である。現在、下関と北九州（小倉）という

極めて近接した地域に日銀の支店が置かれているのは、こうした関門地域の特殊性を反映したものである。しかも、関門地域に日銀の支店を置くことになったのは、明治時代に、長崎の貿易、筑豊の石炭、八幡の製鉄など、九州方面の経済活動を支援することが目的であった。西部支店開設以前には、日銀は大関に支店を有するのみであり、九州の銀行が営業資金を借り入れるためには、日銀大阪支店との間で現金輸送をする必要があった。このため、九州の実業家は、全国平均に比べて、高い金利を払う必要があったという。

高橋是清は、日銀西部支店長に就任するとただちに山陽と九州の金利を大阪や東京と同じ水準まで下げるよう尽力した。彼の自伝には、上司である監督理事と対立し、総裁の裁可を仰いでまでも、金利差を縮小させようとした様子が描かれている。

最近の研究によれば、日銀西部支店の開設により、九州の金利と全国平均との差が、三・〇九%から〇・八五%にまで低下したことが指摘されている。全国一律の金利体系は、統一国家の基本である。こうした取り組みによって、幕末までは各藩ばらばらであった日本の地方とその経済が、明治期にひとつの国家として統合されていったのである。

それでは、西部支店はなぜ、九州ではなく下関に置かれたのだろうか。実は、元々の候補地は門司であった。当時の川田日銀総裁が九州地方を視察し、まず門司に土地を購入した。しかし、当時の門

司は、まだ市街が発達しておらず、会社といえ九州鉄道会社の本社がある程度であったという。このため、購入した門司の土地に建物を建てるのは延期して、当時より繁栄していた下関側に支店を設置することとしたのである。

日銀は最初から現在の岬之町に置かれていたわけではない。西部支店開設当初、高橋は清が十四人の職員とともに支店を開設したのは、南部町の南西側の一角であった。現在は商店もあまりない、静かな通りであるが、明治の終わりから大正・昭和初期にかけて、この辺りには多くの銀行が軒を連ね、大変にぎわっていたらしい。元々、南部町の中通りは山陽道の一部にあたり、江戸時代の北前船の船着き場近くに廻船問屋が並ぶ通りで、現在の国道側は海だった。明治になって、こうした廻船問屋の建物が銀行に転用されたのである。

是清らが入ったのも、元はこうした廻船問屋だった二階建ての家屋で、一階には問屋の営業場に用いられた大広間が、二階には船頭が寝泊まりする小部屋があったという。是清は、開業一週間前に下関入りし、建物の内部を檢分したところ、そのままでは日銀支店には適さない構造であることが分かった。そこで、昼夜を分かたぬ突貫工事で一階営業場の仕切り板を取り外すなどの改築を施し、金庫その他の設備を整備して、明治二十六年十月一日に開業となった。

この支店の正式名称は西部支店であったが、その所在地は下関であり、当時は赤間関、あるいは馬関と呼ばれていた。

このため、是清は、その自伝の中で、自分が「日銀馬関支店長に就任」したと書いている。是清は二年弱で東京に転勤となり、二代支店長・浜田市助、三代目支店長・志立鉄次郎までの三人の日銀西部支店長が「日銀馬関支店長」であった。そして、明治三十一年十月、志立支店長の時代に、日銀西部支店は門司に新築した店舗に移転し、下関を去った。

その後、約五十年間、関門地区の日銀は門司側にあった。しかし、太平洋戦争の終盤、米軍の空襲によって、関門地域は壊滅的な被害を受けた。辰野金吾設計による日銀門司支店（西部支店から改名）も、昭和二十年六月の空襲で全焼してしまった。門司支店の職員は、仮設店舗を設けて営業を続けたという。

戦後、経済が復興してくると、経済の血液たる金融業も忙しくなる。ここで問題となったのが手形交換であった。今も昔も、民間金融機関は毎日、決済期日を迎えた手形や小切手を持ち寄って一堂に会し、それらを交換して資金決済を行う。これを「手形交換」という。日銀は、「銀行の銀行」として、金融機関からの預金を預かっており、その振替によってこの手形交換の資金決済を支えている。例えば、日銀下関支店には、山口県内に本支店を持つ多くの金融機関が預金口座を持っており、山口県内での手形交換の最終決済を、日銀下関支店の預金口座で行っている。

ところが、昭和二十年当時、山口県側には日銀の支店はなかった。このため、山口県内の金融機関は、海峡を渡って門

司まで手形交換に向かなければならず、これが大変な負担だったという。

こうしたこともあって、下関側に日銀を開設して欲しいという話になり、昭和二十二年、現在の地に下関支店が再開されたのである。現在、岬之町の日銀がある場所は、戦前は下関税務署の庁舎が建っていた。戦災に遭ったこの建物を補修し、岩瀬支店長以下職員総数七十八名が業務を開始したのが昭和二十二年十二月一日のことである。

実は、山口県には、下関以外に、山口市にもかつて日銀があった。昭和二十一年に、日銀広島支店が、日銀山口事務所を開設している。しかし、当時、山口市には日銀が取引する金融機関がなく、もっぱら戦後復興関係の事務を行っていた。この事務所の機能も、下関支店が引き継いでいる。なお、昭和二十三年には門司支店が門司事務所組織替えになつていたので、関門地区の日銀支店は五十年を経て門司側から下関側に戻ってきたことになる。

この岬之町にあった古い日銀の建物は、老朽化が激しくなつたため、昭和四十八年に取り壊して建て直すことになった。このため、日銀は、観音崎町にある旧山口銀行本店（現やまぎん資料館）を一時的に間借りして仮店舗とした。その後、昭和五十年に、新築された岬之町の

現店舗に移り、現在に至っている。

つまり、西部支店時代からみると、下関の日銀支店は、①南部町↓（門司）↓②岬之町↓③観音崎町↓④岬之町、と四回、下関市内を転々としたことになる。日銀下関支店は、日銀の支店としてはかなり異例な、市内で多くの引越しの経験を持つ支店なのである。

